関西大学
なにわ・大阪文化遺産学研究センター　News Letter

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
オープン・リサーチ・センター整備事業（平成 17 年度～平成 21 年度）
なにわ・大阪文化遺産の総合人文学的研究

難波潟

2009. 8
No. 12

題字　浅野鈴秀氏（日本書芸院一科審査員）

第６回ワークショップ「サロン・ド・西尾家 ―吹田の文化遺産―」

2009 年 3 月 14 日（土）
会場　吹田市立内本町コミュニティーセンター会議室
第１部　講演
青山賢信氏（大阪工業大学名誉教授）
「旧西尾家住宅の建築」
第２部　現地見学
旧西尾家住宅（吹田文化創造交流館）

2009 年 3 月 14 日（土）、第６回ワークショップ「サロン・ド・西尾家－吹田の文化遺産－」を開催した。第１部は吹田市立内本町コミュニティーセンターでの講演、第２部は旧西尾家住宅での現地見学という、二部構成で行なった。

旧西尾家住宅は、現在は吹田文化創造交流館として保存・公開されているが、西尾家は江戸時代に仙洞御料庄屋を勤めていた旧家である。数寄屋風の主屋、茶道藪内家ゆかりの茶室、著名な建築家武田五一の手とされる和洋折衷の離れなど、多彩な歴史的建造物からなっている。また音楽家貴志康一（1909 ～ 1937）が母の実家でもある西尾家を幼少期に訪れていたり、12 代当主の西尾與右衛門が植物分類学者牧野富太郎（1862 ～ 1957）と深い親交をもつなど、文化交流の場でもあった。

第１部では、長らく旧西尾家住宅の調査に携わってこられた青山賢信氏にご講演いただいた。会場となった吹田市立内本町コミュニティーセンターは、旧吹田村の中心部である高濱神社のそばに立地し、旧西尾家住宅や吹田歴史文化まちづくりセンター「浜屋敷」からもほど近い。当日はあいにくの雨模様だったにもかかわらず、申込者だけでなく飛び入りでの参加もあり、お借りした会議室が満席になる盛況ぶりだった。

センター長の挨拶に続いて行われた講演では、現在の表門側（南側）は昔は野道で、今の裏門が昔の表門であったことなど、旧西尾家の移り変わりについて、住宅設計図や見積用の平面図を示しながらのわかりやすい解説がなされた。旧西尾家住宅の大きな特徴としては、①茶道の要素が強く、藪内流との関係がみられること、②近代産業の早期導入も含め施主の教養や意向がよく反映されていること、③大店に多く用いられた町屋の造りである表屋造を農村住宅において採用していること、などがあり、一般的な江戸時代の庄屋クラスの家とはひと味違う屋敷であったと話された。なお、旧西尾家住宅の設計についてはっきり分かっているのは大工の棟梁の名前だけであり、武田五一が関わったことは実証されていないという。ただし建物内のデザインなどに武田らしい要素が感じ取られるため、おそらく大工が設計したものに、武田が助言したのではないか、とのことであった。

青山賢信氏

熱心に耳を傾ける参加者

吹田文化創造交流館長・芝本昌洋氏

現地見学にも多くの参加者が集まった

幸い雨の止んだ午後からの第２部では、旧西尾家住宅（吹田文化創造交流館）を実際に見学した。吹田文化創造交流館芝本昌洋館長の挨拶の後、旧西尾家住宅の案内ボランティアの方がたを館長から紹介していただいた。案内ボランティアの方がたは通常、館に数名ずつ常駐しておられるが、この日はワークショップのために普段より多くの人手を割いていただいた。一度に大人数では見学出来ないため、一般参加者 31 名を５班に分け、各班はボランティアの方がたの案内で見学した。母屋、庭、離れなど各所からそれぞれの班がスタートする形で、ボランティアの方がたは手慣れた様子であった。大人数であったため各班にスタッフが一人ずつ付き添ったが、混乱もなく、参加者は皆熱心に解説を聞き、質問も飛び交った。実質の見学時間は一時間半だったが、非常に充実した時間であった。

会場間は徒歩で 10 分ほどの距離とはいえ、午前と午後の二会場での開催となったため、スタッフは参加者の誘導や会場準備などで大わらわであった。しかし、終わってみれば大きな問題もなく、盛況のうちに終えることが出来た。天候不順にもかかわらず高い参加率であった今回のワークショップからは、地元の身近な文化遺産に対する関心の高さ、また近くであるが故に今まで見過されてきた文化遺産を知ろうという意欲が感じられた。

（生活文化遺産研究プロジェクト R.A.　影山 陽子）

ボランティアの方がたによる説明を聞きながら

第2回文化遺産学交流会

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターと関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

2009年3月7日（土）

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

第1回目の東北文化研究センターにつづいて、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターとの文化遺産学交流会を開催した。

神戸大学の地域連携センターは、1995年の阪神・淡路大震災の被災地での経験や、兵庫県内の過疎地・人口流動地における歴史文化に対する危機意識から、兵庫県内の自治体・住民組織と連携し、“地域遺産”を活かしたまちづくりを支援するために、2002年に設立された。

今回の交流会は、関西を活動の基盤にし、スタッフが歴史学系の研究者中心であるというお互いの共通点を活かし、文化遺産を通じた地域連携の可能性を探ることが主な目的とされた。参加者は26名であった。

お互いのスタッフ紹介の後、地域連携センター事業責任者の奥村弘氏と当センターの藪田貫総括プロジェクトリーダーから、それぞれの活動の理念や地域連携における大学の役割などが報告され、フロアからもさまざまな意見がだされ、活発に議論が交わされた。

つづいて、河野（こうの）未央氏による「水損史料の応急処置実習」と題したワークショップを行った。阪神・淡路大震災以降の度重なる地震災害は、地域の歴史を伝える貴重な史料にも大きな被害を与えた。ボランティア団体「歴史資料ネットワーク」は、こうした全国各地の被災史料の“救出”活動を行っているが、兵庫県北部に甚大な被害を及ぼした2004年の台風23号の際には、水損した史料のレスキュー・保管・修復に大きく貢献した。ワークショップは、河野氏らが歴史資料ネットワークの活動を通じて得た水損史料の応急処置についての実習である。河野氏からの説明の後、ペーパータオルによる吸水法に取り組んだ。水にどっぷりと浸し水損史料に見立てた冊子本の一帖ごとにペーパータオルを挟み込む作業を数回繰り返すと、驚くほどに水分が吸収されて重量が軽くなる。一同、夢中になり過ぎて予定時間を大幅に超過してしまうことになったが、今まであまり意識していなかった「文化遺産を救う」ということを考える機会となった。

交流会の後半は、地域連携センターの坂江渉氏と当センターの内田吉哉特別任用研究員から、それぞれの具体的な活動が紹介された。最後に、兵庫県丹波市青垣町をフィールドに、2007年から現代的教育ニーズ取組支援プログラム「農山村集落との交流型定住による故郷（ふるさと）づくり－持続的に“関わり続けるという定住のカタチ”による21世紀のふるさとづくり－」として活動する本学環境都市工学部の岡絵里子氏から、青垣町での取り組みについて報告があり、2回目の交流会は終了した。

前回の交流会では、文化遺産に対する意識やその取り組み方が地域性に大きく依存していることを感じた。今回は、活動の場や携わるスタッフに類似点があるために文化遺産に対する発想には共通性があるだろうと予想していたが、それぞれの文化遺産に対するスタンスや発想には多くの異なる点を見出すことができた。改めて地域の特性に文化遺産が深く結びついていることに気づかされるとともに、文化遺産には多様なアプローチが必要であることを実感した。今後は、お互いの特長を活かしながら連携して、「文化遺産学」の裾野を拡げることこそが重要なのではないだろうか。

（P.D. 櫻木　潤）

語り合う藪田 貫氏（左）と奥村 弘氏（右）

水損史料の応急処置実習の様子

研究室だより

2008年度　第2回歴史資料遺産研究例会

浜野　潔氏（関西大学経済学部教授・センター研究員）

「近世三都の歴史人口学―江戸・大坂・京都―」

2008年12月18日（木）

2008年度第2回研究例会では、近年注目を集めている歴史人口学について、江戸・大坂・京都を素材にして浜野潔氏からご報告していただいた。

まず、歴史人口学とは1950年代にフランスの人口学者ルイ・アンリ氏によって提唱されたこと、日本への導入は1960年代に速水融氏によって行なわれ、「宗門改帳」を利用した研究がスタートしたこと、それによって出生・結婚・死亡・人の移動をも含めた真の「庶民生活史」研究が可能となったこと、などが述べられた。

次に、近世三都町方の人口について、16世紀末から17世紀にかけて爆発的に増加したこと、18世紀以降、大坂・京都は停滞・減少したこと、19世紀には江戸も停滞・減少したこと、などが確認された。

続いて、京都の歴史人口学について、具体的に衣棚南町・北町や志水町、花車町などの人口変動に関する詳細なデータが示された。その分析からは、近世後期京都の人口は一貫して減少していたわけではなかったことなどの実態が明らかにされた。さらに、京都の奉公人についての分析からは、幕末に向けて奉公人の人口は増加するが、開港後・元治大火後は減少したこと、平均奉公期間は男子が5年弱、女子が2年弱などの興味深い指摘がなされた。

今回の発表では、歴史人口学で多用される「宗門改帳」について、例えば、大坂では年齢が記されないが、京都では記されているため年齢分析が可能である、と指摘された。このように、同じ種類の歴史資料でも地域によって、そのあり方が異なること、さらに資料そのものが持つ可能性、あるいは限界などを考える機会となった。

（歴史資料遺産研究プロジェクトR.A.　松永 友和）

浜野 潔氏

2008年度　第2回生活文化遺産研究例会

妻木　宣嗣（のりつぐ）氏（大阪工業大学准教授・センター研究員）

「神社空間の「にぎわい」と人の「ふるまい」

―祭礼時の参道デザインと、人の行動を素材に―」

2008年12月20日（土）

今回の例会では、まずはじめに日本建築史学という分野の特殊性を鑑みて、研究状況やいくつかの概念が紹介された。たとえば、手がかりとなる方法論の一つに、人間の自然な行動を促す空間への認識を説いた、J・Jギブソンのアフォーダンスが挙げられる。そして「人のふるまい（Human behavior）」を最初に概念化したフィリップ・シールの研究も重要である。

妻木氏は、この「人のふるまい」に適った空間はすでに前近代から存在していると指摘し、日本の空間こそが人の心配りや気遣いなど、そこに介在する「人間」の姿を最も顕著に感じられる空間であると述べた。具体的には、縁側や庇の下などの境界的空間がそうであり、人びとが心地よさを感じる場所と言い換えることもできる。

今回は、氏が当センターとの共同研究で取り組んだ、道明寺天満宮の実測調査の結果からの詳細な分析が述べられた。寺社の参道は、近代工学的な仕掛けがないにもかかわらず、さまざまな空間構成、密度、偏差から、とくに人の「ふるまい」に適った空間であり、そうした人びとの行動によって一定の「にぎわい」が創出されていることが示された。

生活文化遺産研究プロジェクトでは、衣食住を中心に文化遺産学を考えることをその研究の骨子としている。しかし、建築物や食物、衣服というハード面だけでなく、そこに関わって生きている人びとの行動や心性などのソフト面を忘れてはいけない。そのことを再認識させられる例会であった。

（生活文化遺産研究プロジェクト　石本 倫子）

妻木 宣嗣氏

2008年度　第2回学芸遺産研究例会

中尾　和昇（学芸遺産研究プロジェクトR.A.）

「馬琴の見た大坂―鬼洞文庫一枚摺を手がかりに―」

2009年1月19日（月）

学芸遺産研究プロジェクトでは、関西大学図書館に所蔵されている鬼洞文庫一枚摺の調査・研究を行なっており、その成果として、データベースの公開が進められている。鬼洞文庫一枚摺は引札や商品切手が多数を占めるが、その中には近世期の大坂の名所を描いた絵図なども含まれている。そこで今回の研究例会では、私が研究対象としている江戸生まれの曲亭馬琴が見た大坂を、一枚摺を素材として視覚的に捉えることを目的とした。

まず、曲亭馬琴が享和2年（1802）に大坂や京都を訪れた際の旅行記である『羇旅漫録』を足掛かりに、大坂の各所を訪れた際の記述を分析した。その結果、馬琴は大坂で著名な寺社を訪れていることがわかった。とりわけ四天王寺や住吉大社といった大きな寺社については記述が多い。そこで、馬琴の記述と鬼洞文庫一枚摺に描かれた住吉大社や四天王寺などと比較・対照することにした。例えば、住吉大社近くの料亭「難波屋」を訪れた際には、大きな松の巨木を「つくり木ながら、四方二十軒ばかりまんまるに笠の如く茂生す」と表現した。さらに「松のかたちを紙にすりてうるなり」とも述べている。これにより、一枚摺に描かれた松の図を多面的に捉えることができた。また、大田南畝を介した田宮仲宣や馬田柳浪といった大坂の文人たちとの交流関係を通して、本格的な読本の初作『月氷奇縁』（文化2年〔1805〕刊）の成立にも言及した。

今回の報告は、馬琴の大坂旅行に引き付けた内容となり、引札や商品切手など他の多くの一枚摺については触れることができなかった。今後は、それぞれの一枚摺からうかがえる情報を詳細に検討し、データベースの構築に活かしていきたいと考えている。

（学芸遺産研究プロジェクトR.A.　中尾 和昇）

関西大学図書館蔵 鬼洞文庫一枚摺「難波屋の松」

2008年度　第2回祭礼遺産研究例会

森本　安紀氏（関西大学大学院博士課程後期課程）

「『神社を中心とする村落生活調査報告』からみる年頭行事」

藤岡　真衣（祭礼遺産研究プロジェクトR.A.）

「『神社を中心とする村落生活調査報告』からみる和泉地方の祭礼行事」　　2009年1月22日（木）

今回は、2009年10月に当センター刊行予定の叢書13『神社を中心とする村落生活調査報告（三）堺市・岸和田市・泉北郡・泉南郡』を中心に、これまでに発刊されている『同（一）大阪市・三島郡・豊能町』『同（二）北河内郡・中河内郡・南河内郡』に関する報告があった。

まず、R.A.藤岡からは『神社を中心とする村落生活調査報告』（以下『調査報告』）における調査の結果から、それが氏子組織や祭礼に重点が置かれた資料であることが確認された。そして、堺市、泉佐野市、貝塚市の神社をとりあげ、『府社現行特殊慣行神事』（1932）や『郷社現行特殊慣行神事』（1934）、あるいは雑誌『上方』などとの照合により、各神社で行われている祭礼の歴史を紐解くことができる、とした。

一方、森本氏は自身の研究が年頭行事であることから、『調査報告』の年頭行事についての記載に注目した報告を行なった。大阪府下神社での年頭行事の実施状況とともに、年頭行事について記載のある大阪府内の市史の分布状況を地図上に示し、今回の『調査報告』がどのように反映されているかを述べた。

質疑応答では、『調査報告』資料と他の神社資料との関連や、具体的に挙がった神社についての情報交換などがなされた。また、藪田総括プロジェクトリーダーは、『都市と日本人』（上田篤著）から、「都市とは神社である」とし、神社を構造物としてとらえるのではなく、人々が集まるコミュニティーの場として考えることの重要性や、『調査報告』における神社調査は肥後和男氏の宮座研究と深くかかわってはいるが、肥後の意識下になかったものを私たちは考えていく必要があることを述べた。

（祭礼遺産研究プロジェクトR.A.　和住 香織）

藤岡 真衣（左）、森本 安紀氏（右）

「上町台地の社寺や生活にかかわる年中行事―暮らしの歳時記調査―」
2008年度上町台地マイルドHOPEゾーン協議会受託研究

センターでは、2008年度に、上町台地マイルドHOPEゾーン協議会（以下、協議会）からの受託研究として、「上町台地の社寺や生活にかかわる年中行事－暮らしの歳時記調査－」を実施した。

この調査は、戦前から高度経済成長期にいたる上町台地の暮らしの様子を、生活にかかわる年中行事を通して確認することを目的とし、上町台地で生まれ育った方や幼少期に住んでおられた方などから、当時の様子を聞き取るというものであった。調査地点は、協議会が規定している上町台地（北は大川、南は天王寺公園、西は松屋町筋、東はJR大阪環状線の範囲）のうち、中央区東高麗橋、同区上町・法円坂周辺、同区谷町六丁目周辺、同区上汐一丁目、天王寺区玉造本町、同区上本町六丁目、同区大江周辺、同区四天王寺周辺の8ヶ所で、計22名の方にお話をうかがった。

まず調査を始めるにあたり、1月から12月の年中行事についての質問調査票を作成することとした。そのなかには、正月のお飾りや節分の豆まき、盆の行事など、今でもよく行なわれているものが含まれているが、自分の家でも行なわれている行事が、上町台地ではどのように行なわれているのだろうかと考えると期待に胸がふくらんだ。

調査は、黒田一充研究員が中心となって進められた。項目の内容だけにとらわれず、話者が話す様ざまな思い出に合わせて、臨機応変に話を聞いていく方法を目の当たりにし、聞き取り調査の難しさを感じた。

調査の中で印象に残ったのは、正月の行事であった。正月を迎える準備の餅つきでは、各家をまわる「賃つき屋」に餅をついてもらうことが多かったそうである。餅をつく日にちは、それぞれの家によって異なり、9という数字が苦に通じることから29日を避けるところがあれば、29日を「フク」といって餅をつく日にしたところもあった。調査から、餅つきは多くの家庭で行なわれていた共通の行事であったことがわかるが、その内容は地域や家庭によってそれぞれ異なり、上町台地という一地域を見ても、年中行事の多様さがあることに驚かされた。また、大晦日から正月にかけて、商家では玄関に家紋入りの幔幕を張り、盆や三方を置いた。年始に訪れる人は、そこに名刺を入れて挨拶代わりにしたようだ。こうした事例は、商都大阪ならではの風習であり、生業によって、正月の迎え方にも特徴があったことはとても興味深かった。

年中行事から、祭りや催し物の話にうつると、話者の記憶が一層鮮明によみがえった。例えば、春と秋の彼岸には四天王寺へお参りに行く人が多く、境内では「地獄極楽」といったのぞきからくりや大道芸の一つである蛸蛸踊（張りぼての大きな蛸を頭にかぶって踊るもの）、様ざまな物売りを見るのが楽しみだったという。今となっては見ることができなくなった大道芸の様子を語り、物売りの声色を真似てくださる話者の方がたは、まさに、上町台地の生活にかかわる文化遺産を目の前によみがえらせてくれる貴重な存在だといえる。

これらの調査結果は、『上町台地の社寺や生活にかかわる年中行事－暮らしの歳時記調査－報告書』として一冊にまとめた。2009年5月16日には、協議会の報告会において、調査の内容と結果を報告する機会を得た。

調査結果によると、ご協力いただいた方がたの幼少期が、戦中または戦後にあたり、その頃に行なわれていた年中行事の内容は大変限られたものだとわかった。しかし、困難な時期にありながらも、年中行事が守り続けられたことから考えると、これらを記録として残すことができた意義は非常に大きい。

このたびの調査を通して、年中行事のほかにも、戦争中の生活や様ざまな出来事について貴重な話をうかがった。こうした体験談をもとにして、当時の上町台地の具体的な生活状況についての調査が、今後は必要になってくるであろう。

※このたびの調査にご協力くださいましたすべての方がたに、心より厚く御礼を申し上げます。

（祭礼遺産研究プロジェクトR.A.　藤岡 真衣）

調査の様子

新刊紹介

NOCHS Occasional Paper No.8
「なにわの食文化―「天下の台所」からみる日本食―」

2008 年 7 月 3 日に行なった第 7 回 NOCHS レクチャーシリーズ「なにわの食文化―「天下の台所」からみる日本食―」の講演録。

（A4 版･モノクロ 55 頁･横書･2009 年 3 月 24 日）

なにわ・大阪文化遺産学叢書 12
「金属製品の保存処理―本山コレクションを対象に―／考古遺跡の分析学的研究―^{14}C年代測定、粒度分析、堆積物 X 線像、安定同位体比―」

（A4 版・カラー 4 頁・モノクロ 100 頁・横書・2009 年 3 月 31 日）

なにわ・大阪文化遺産学叢書 9
「長島侯増山雪斎独楽園賀詞帖」

センター所蔵資料である『長島侯増山雪斎独楽園賀詞帖』の図版と印章を原寸で掲載し、解説と関連論考も収録。

（ A4 版・カラー 22 頁・モノクロ 50 頁・縦書・2009 年 3 月 31 日）

国際シンポジウム報告書
新発見「豊臣期大坂図屏風の」魅力―オーストリア・グラーツの古城と日本―
新発見「豊臣期大坂図屏風」を読む

（A4 版・カラー 4 頁・モノクロ 89 頁・横書・2009 年 3 月 31 日）

なにわ・大阪文化遺産学叢書 10
「大坂代官　竹垣直道日記（三）」

東京大学史料編纂所蔵『竹垣直道御代官日記』の弘化 2 年正月元日～弘化 3 年 12 月晦日分を翻刻。

（A5 版・モノクロ 309 頁・縦書・2009 年 3 月 31 日）

なにわ・大阪文化遺産学研究センター 2008

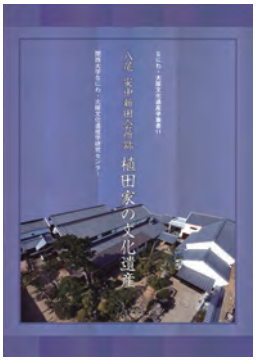
2008 年度センター年次報告書。

（A4 版・モノクロ・横書 91 頁・縦書 78 頁・2009 年 3 月 31 日）

なにわ・大阪文化遺産学叢書 11
「八尾 安中新田会所跡　植田家の文化遺産」

2005 年度より行なってきた旧植田家総合調査の報告書。

（A4 版・カラー 20 頁・モノクロ 27 頁・縦書・2009 年 3 月 31 日）



NOCHS Occasional Paper No.9
「平野をさぐる」

2008 年 10 月 5 日、26 日に行なった地域連携企画第 4 弾「平野をさぐる」の記録。

（A4 版・カラー 2 頁・モノクロ 55 頁・横書・2009 年 6 月 30 日）

夏野菜の栽培と収穫

今年度もセンターの農園にて、毛馬胡瓜（けまきゅうり）・勝間南瓜（こつまなんきん）・玉造黒門越瓜（たまつくりくろもんしろうり）を栽培しています。毛馬胡瓜は一足先に収穫を迎え、64 本収穫することができました（7 月 22 日現在）。また後を追うようにして、勝間南瓜と玉造黒門越瓜も大きく実り、初収穫にこぎつけました（南瓜 9 個、越瓜 5 本／8 月 26 日現在）

毛馬胡瓜の収穫（2009 年 6 月 15 日）

勝間南瓜（2009 年 7 月 29 日）

新任者紹介

今年度より、新たに着任した研究員は以下の通り。

研究員　朝治　啓三（学芸遺産研究プロジェクト／本学文学部教授）

来館者の紹介

2009 年 2 月 9 日～ 3 月 31 日

Doreen Müeller（ドリーン・ミューラー）氏

（ロンドン大学 SOAS 人文学部美術考古学科博士課程）

ミューラー氏は江戸時代後期の災害に関する絵画資料を研究されており、今回は鬼洞文庫一枚摺の災害資料の調査のため、非常勤研究員としてセンターに滞在されました。

2009 年 6 月 11 日

Jutta Stefan-Bastl（ユッタ・ステファンバストル）氏

（在日オーストリア大使）

関西大学への表敬訪問の後、「豊臣期大坂図屏風」の複製を視察に来館されました。

安中新田会所跡 旧植田家住宅オープン

2005 年から当センターで調査を行なってきた植田家が、2009 年 5 月 6 日に「八尾市指定文化財・安中新田会所跡（やすなかしんでんかいしょあと）旧植田家住宅（きゅうういえだけじゅうたく）」として開館しました。

お問合せ：〒 581-0084 八尾市植松町 1 － 1 － 25
Tel・Fax 072（992）5311

編集後記

「難波潟みじかき葦のふしのまもあはで此の世をすぐしてよとや」（『新古今集』巻十一）

「難波潟」と聞くと、私はこの歌を思い起こします。三十六歌仙の一人で知られる、平安女流歌人の伊勢。いま、彼女がうたいあげた恋情にではなく、「短き葦の節の間」を惜しむ気持ちに共感を覚えています。

センターはいよいよ集大成の年を迎えました。一つ一つの出来事、出会いをいつくしみながら、ひたすら前進していきたいと思います。どうぞ、よろしくおねがいいたします。

（生活文化遺産研究プロジェクト　石本 倫子）

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
オープン・リサーチ・センター整備事業（平成 17 年度～ 21 年度）
なにわ・大阪文化遺産の総合人文学的研究

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター
News Letter「難波潟（なにわがた）No. 12」

発行日　2009 年 8 月 31 日
発行所　関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター
発行者　髙橋隆博
〒 564-8680　大阪府吹田市山手町 3-3-35
TEL 06(6368)0095　Fax06(6368)0092
http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/home.htm
E-mail　naniwa@jm.kansai-u.ac.jp
印刷所・編集協力　（株）廣済堂